

間違いだらけの学習論 ——なぜ勉強が身につかないか——

西林克彦 著

我々は、日常的に工業の専門の教育に従事しているため、経験中心の技術教育や技能教育の視点で学習や教育を考えているため、教育の学問的な視点を軽視しがちとなり、近視眼的になっていないだろうか。そこで、たまには工業教育を教育学的視点で考える参考書として、易しく分かりやすい良書を紹介する。

著者は、東工大で制御工学を学んだ後、東大大学院で学校教育について研究し、現在は宮城教育大で学習過程を中心に、現場の先生達と実践研究に取り組んでいる。

教師は、知識が身につかないと、その生徒の意欲や努力が足りないと考えがちである。つまり、知識の習得を「意欲」や「努力」という知識でない別の方法で解決しようとしていると指摘している。

著者は、学習や教育の効果を考えるとき、生徒の意欲や努力ではなく、生徒が既に持っている知識に着目した学習論を展開している。

本書は、第1章「有意味な学習と認知構造」、第2章「有意味な学習の特徴」、第3章「理解と応用」、第4章「知識と教育」、第5章「教育への提言」で構成されている。

第1章「学習論にまちがいはないか？」では、「学習対象の量が少ないほどやさしい」「繰り返す経験すればするほど、よくできるようになる」ことは、必ずしも正しくないことを事例で示している。例えば、記憶術では、無意味なモノを有意意味化して記憶するように、学習対象の量は増えても有意意味化した方が一般的に学習成果はあがる。

さらに、人により認知の仕方はそれぞれ異なるのであり、生徒の認知構造に着目し、各自の認知構造に合った学習により効果が上がることが解説されている。

例えば、何にも考えずに反復練習しても効果は期待できないが、単なる繰り返しでなく毎回異なる目標を決めて、反復練習することにより成果が上がると指摘している。

第2章では、「有意味学習の特徴」について、有意味とは、生徒の認知構造に関連づけられた学習であり、有意味受容学習により成果が上がるとしている。認知構造の中にあるモノを「知識」とし、その知識も道具のように、使い勝手の善し悪しがあると指摘している。また、無意味な学習と違い、学べば学ぶほど有意味学習では知らないことに気づき学びは拡大するとしている。

第3章では、「知識」について検討し、一般性をもった知識を法則的知識とし、その「理解」は、「応用」に拡大していくと述べている。

第4章では、「知っているが使えない」「知識はあるが使えない」、そのような人の知識のありようについて指摘している。

応用できないことは、「知能や能力や姿勢」ではなく、その人の持っている「知識」そのものに課題があると指摘している。つまり、知識の問題を知識で解決せず、ゆとりや姿勢や意欲で解決しようとするところに問題がある。

また、教育内容と教育方法を分離して考えている場合が多く、教え方の工夫は内容の改善や豊富化にもつながり両者は切り離せないことを指摘している。

第5章では、「詰め込み教育」の課題は「詰め込めない」ことであり、「教科書は厚い方がよい」とし、「理屈があるのにその理屈を減らし丸暗記させられている」のが現状としている。

(新曜社、B6判196頁、¥1800) (山下省蔵)